令和８年 １０月３０日	病害虫発生予報 １１月号	茨城県病害虫防除所

収穫終了後は被害葉等の残渣をほ場から持ち出し、次作の病害虫の発生源を減らしましょう。

＜　目　次　＞

Ⅰ．今月の予報

【注意すべき病害虫】

イチゴ：チョウ目害虫（ハスモンヨトウ、オオタバコガ）・・・・・・・・・・・・・・ 1

イチゴ：ハダニ類・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

促成ピーマン：アザミウマ類、コナジラミ類・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

秋冬ネギ：黒斑病（葉枯病を含む）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

【防除所レポート】フェロモントラップへのトマトキバガの誘殺数が多い状況です。・・・・ 3

秋冬ハクサイ：コナガ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

冬レタス：すそ枯病・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

○トマト・キュウリ栽培におけるコナジラミ類の防除対策・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

【その他の病害虫】

イチゴ、促成ピーマン、促成キュウリ、秋冬ネギ、共通害虫・・・・・・・・・・・・・・ 6

【防除所レポート】

ひこばえ（再生稲）におけるイネ縞葉枯病の発生状況と防除対策・・・・・・・・・・・ 7

ナシ黒星病（秋型病斑）の発病葉は翌年の伝染源となります。・・・・・・・・・・・・・ 8

令和８年の果樹におけるカメムシ類の発生経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9

Ⅱ．今月の気象予報・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10

最新の農薬登録内容は、農林水産省ホームページの
「農薬登録情報提供システム」（https://pesticide.maff.go.jp/ ）で確認することができます。

詳しくは、病害虫防除所へお問い合わせ下さい。Tel ：0299-45-8200

ホームページでは病害虫・フェロモントラップ・農薬関連情報がご覧いただけます。

https://www.pref.ibaraki.jp/nourinsuisan/nosose/byobo/boujosidou2/

※病害虫の発生状況や、適切な防除方法は地域により異なる可能性があります。病害虫の防除や農薬についてのご相談は、お住まいの都道府県にある病害虫防除所等の指導機関にお問い合わせください。

Ⅰ．今月の予報

【注意すべき病害虫】

イチゴ

１．チョウ目害虫（ハスモンヨトウ、オオタバコガ）

［予報内容］

発生時期	発　生　量	発生地域
－	多い	県下全域

［予報の根拠］

① 10 月下旬現在、ハスモンヨトウの被害株率（本年値 0.9%、平年値 0.2%）、発生地点率（本年値 71%、平年値 28%）ともに平年より高い。

② 10 月下旬現在、オオタバコガの被害株率（本年値 0.1%、平年値 0.005%）、発生地点率（本年値 29%、平年値 3%）ともに平年より高い。

［防除上注意すべき事項］

① ハウスの開口部に防虫ネットを設置し、成虫の侵入防止に努める。

② 幼虫の齢期が進むほど薬剤に対する感受性が低下するため、ほ場をよく観察し、若齢幼虫のうちに防除を行う。

③ 薬剤散布は、薬液が葉裏や株元にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、複数回散布する場合は、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。

④ 病害虫防除所ホームページに、フェロモントラップの誘殺状況を公開しているので参考にする。

２．ハダニ類

［予報内容］

発生時期	発　生　量	発生地域
－	多い	県下全域

［予報の根拠］

① 10 月下旬現在、寄生葉率（本年値 30.9%、平年値 6.8%）、発生地点率（本年値 86%、平年値 41%）ともに平年より高い。

［防除上注意すべき事項］

① ハダニ類は増殖が速く、多発すると防除が困難となるため、発生の少ないうちに防除を徹底する。

② 天敵を導入する場合は、ハダニ類の密度が高いと十分な防除効果が得られないため、薬剤防除等によりハダニ類の密度を減らした上で導入する。

③ 薬剤散布は、薬液が葉裏や葉柄にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、気門封鎖剤以外については、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。

④ ミツバチや天敵を使用している場合は、薬剤の影響日数等に十分注意する。

促成ピーマン

１．アザミウマ類

［予報内容］

発生時期	発　生　量	発生地域
－	やや多い～多い	鹿行地域

［予報の根拠］

① 10 月下旬現在、寄生花率（本年値 44.5%、平年値 19.3%）は平年より高く、一花あたりの寄生虫数（本年値 1.2 頭、平年値 0.9 頭）は平年よりやや多い。

［防除上注意すべき事項］

① アザミウマ類は増殖が速く、各種ウイルスを媒介するので発生の少ないうちに防除を徹底する。
② 薬剤散布は、薬液が花や果実にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
③ 天敵を使用している場合は、薬剤の影響日数等に十分注意する。

２．コナジラミ類

［予報内容］

発生時期	発　生　量	発生地域
－	やや多い	鹿行地域

［予報の根拠］

① 10 月下旬現在、寄生葉率（本年値 8.0%、平年値 4.5%）は平年よりやや高く、発生地点率（本年値 75%、平年値 63%）は平年並である。

［防除上注意すべき事項］

① 発生が多くなると防除が困難となる他、果実にすす症状を生じるため発生の少ないうちに防除を徹底する。
② 薬剤散布は、薬液が葉裏にもかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
③ 天敵を使用している場合は、薬剤の影響日数等に十分注意する。

秋冬ネギ

1．黒斑病（葉枯病を含む）

［予報内容］

発生時期	発　生　量	発生地域
―	やや多い～多い	県下全域

［予報の根拠］

① 10 月下旬現在、発病度※（本年値 14.0、平年値 8.1）は平年よりやや高い～高く、発生地点率（本年値 100%、平年値 93%）は平年並である。

※発病度：病斑をもとに算出した数値、最小値は 0 で最大値は 100 となる。

［防除上注意すべき事項］

① 肥料切れや多肥は発生を助長するため、生育状況に合わせ適切な肥培管理を行う。
② 発病初期の防除に重点をおき、その後の発病状況に応じて薬剤散布を行う。
③ 薬剤散布は、必要に応じて展着剤を加用し丁寧に行う。また、収穫前日数に十分注意する。
④ 薬剤感受性の低下を防ぐため、FRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。

防除所レポート

フェロモントラップへのトマトキバガの誘殺数が多い状況です。

トマトほ場等への飛び込みや発生に注意しましょう。

県内 4 地点に設置しているフェロモントラップにおいて、トマトキバガ雄成虫の誘殺が 9 月第 5 半旬以降急増し、過去 3 年間と比較して誘殺数が多い状況で推移しています（図）。

本県では、令和 8 年 8 月にトマトにおいてトマトキバガによる被害が認められました。ほ場をよく観察し、本虫の発生に注意してください。

なお、前年は 11 月末まで誘殺が確認され、他県では、冬期間でも施設内での発生が継続的に確認されていますので、今後も施設内への飛び込みや発生に注意しましょう。

※トマトキバガの形態や防除対策等については、令和 8 年 10 月 14 日発表の病害虫速報 No. 6 を参照してください。

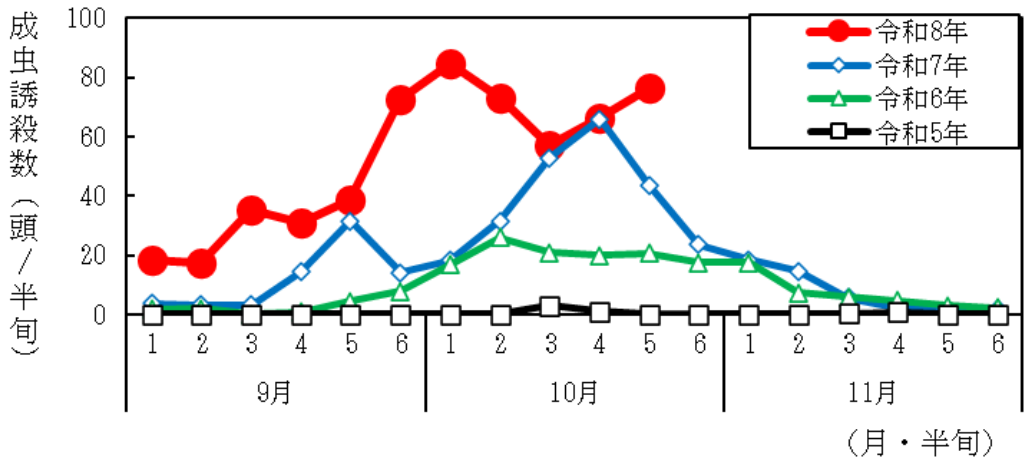


図　フェロモントラップへのトマトキバガ雄成虫の誘殺状況（県内 4 地点合計）

秋冬ハクサイ

１．コナガ

［予報内容］

発生時期	発　生　量	発生地域
－	多い	県下全域

［予報の根拠］

① 10月下旬現在、10株当たりの寄生幼虫数（本年値0.4頭、平年値0.04頭）は平年より多く、発生地点率（本年値12%、平年値2%）は平年よりやや高い～高い。

［防除上注意すべき事項］

① 幼虫の齢期が進むほど薬剤に対する感受性が低下するため、ほ場をよく観察し、若齢幼虫のうちに防除を行う。
② 薬剤散布は、薬液が葉裏までよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、複数回散布する場合は、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。

冬レタス

１．すそ枯病

［予報内容］

発生時期	発　生　量	発生地域
－	多い	県下全域

［予報の根拠］

① 10月下旬現在、発病株率（本年値5.1%、平年値0.2%）、発生地点率（本年値54%、平年値5%）ともに平年より高い。

［防除上注意すべき事項］

① 薬剤散布は、薬液が葉裏や株元までよくかかるように十分な量で丁寧に行う。
② 収穫間近の作型については、特に収穫前日数に注意して薬剤を選択する。
③ 被害葉は翌年の伝染源となるため、ほ場外に持ち出し適切に処分する。

トマト・キュウリ栽培におけるコナジラミ類の防除対策

コナジラミ類は、養分の吸汁による生育阻害や排出物によるすす症状のほか、トマト等では果実の着色異常等の被害をもたらします。

また、タバココナジラミはトマト黄化葉巻病およびトマト黄化病、キュウリ退緑黄化病、オンシツコナジラミはトマト黄化病等の各種ウイルス病を媒介することが知られています。コナジラミ類が発生しているほ場では、コナジラミ類の施設外への飛び出しや次作への持ち越しを防止しましょう。また、これから作付けとなるほ場ではコナジラミ類を施設内へ入れない対策を行うとともに、初期防除を徹底しましょう。

【栽培期間中の対策】

① コナジラミ類の施設内への侵入および施設外への飛び出しを防ぐため、開口部に 0.4mm 目合い以下の防虫ネットを設置する。施設ビニルや防虫ネットに破損がある場合は必ず補修する。

② 黄色粘着板や黄色粘着テープを施設内や周辺部に設置し、コナジラミ類成虫を捕殺する。雑草はコナジラミ類の生息場所となるため、施設内外の除草を徹底する。

【育苗期の防除対策】

生育初期にウイルス病に感染すると被害が大きくなるため、育苗期から定植後の定期的な薬剤散布および定植時期の薬剤処理により、コナジラミ類の防除を徹底する。

【本ぽの防除対策】

① 定植前に苗をよく観察し、新葉の退緑がみられる苗やコナジラミ類が発生している苗を本ぽに持ち込まないよう注意する。

② ウイルス病発病株は伝染源となるため、速やかに抜き取り、適切に処分する。

③ コナジラミ類は多発すると防除が困難となるため、発生の少ないうちに防除を徹底する。

④ 薬剤散布は、薬液が葉裏にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。コナジラミ類の薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。

⑤ トマト黄化葉巻病耐病性品種は、ウイルスに感染しても発病は抑制されるが、感染株は本病の伝染源になるため、タバココナジラミの防除は感受性品種と同様に行う。

【栽培終了時の対策】

コナジラミ類の施設外への飛び出しや次作への持ち越しを防止するため、栽培終了時まで防除を徹底する。栽培終了後には、株を誘引したまま根を引き抜き、2 週間程度ハウスを密閉し、蒸し込みを行い、コナジラミ類を死滅させる。また、薬剤処理による古株枯死を行うことも効果的である。

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予測	発生概況及び注意すべき事項
イチゴ	うどんこ病	発生量：平年並	10 月下旬現在、平年並の発生である。
	アザミウマ類		10 月下旬現在、平年並～やや少ない発生である。向こう 1 か月の気温は高いと予想され、発生を助長する条件である。
	アブラムシ類	発生量:やや少ない	10 月下旬現在、平年よりやや少ない～少ない発生である。向こう 1 か月の気温は高いと予想され、発生を助長する条件である。
促成ピーマン	チャノホコリダニ	発生量：－	10 月下旬現在、促成ピーマンにおいて 4 地点中 3 地点で被害が確認されており、一部ほ場では 2～3 割程度の株で被害が確認されている。
	ハダニ類	発生量:やや少ない	10 月下旬現在、平年よりやや少ない発生である。
促成キュウリ	黄化えそ病	発生量：－	10 月上旬現在、抑制キュウリで平年並の発生である。促成キュウリにおいて、媒介虫であるミナミキイロアザミウマの防除対策を徹底する。
	退緑黄化病		10 月上旬現在、抑制キュウリで平年より少ない発生である。促成キュウリにおいて、媒介虫であるタバココナジラミの防除対策を徹底する。
秋冬ネギ	さび病	発生量：やや多い～多い	10 月下旬現在、平年よりやや多い～多い発生である。
共通害虫	シロイチモジヨトウ	発生量：平年並	10 月下旬現在、平年並の発生である。イチゴ、ピーマン、秋冬ハクサイ、秋冬ネギほ場で発生を認めている。

防除所レポート

ひこばえ（再生稲）におけるイネ縞葉枯病の発生状況と防除対策

病害虫防除所において、本田調査で発病の多かった県央・県南・県西地域の全市町村（33 地点）のひこばえ（再生稲）について、イネ縞葉枯病の発生状況を調査しました。いずれの地域においても、発病株率の高い地点が見受けられ、引き続き徹底した防除対策が必要です。可能な限り速やかにひこばえをすき込むとともに、冬季のイネ科雑草の除草（特にほ場周辺）に努め、ウイルスを保毒したヒメトビウンカの越冬量を減らしましょう。

［現在の発生状況］

① 県央・県南・県西地域のひこばえについて、33 市町村でイネ縞葉枯病の発生状況を調査した結果、31 市町村で発生を確認した（図、表）。
② 地域別の平均発病株率は、県西、県央、県南地域の順で高かった（表）。
③ 今回調査した 33 地点中の最高発病株率は、69.7%であった（表）。

［防除対策］

① ひこばえは、ヒメトビウンカの増殖・越冬場所となるため、収穫後は速やかに耕起する※。
② 畦畔等のイネ科雑草は、ヒメトビウンカの越冬場所となるため、除草に努める。

※畦畔のイネ科雑草におけるヒメトビウンカの越冬虫数は、水田の耕起時期が早いほど少ない（R1 農業研究所主要成果より）。

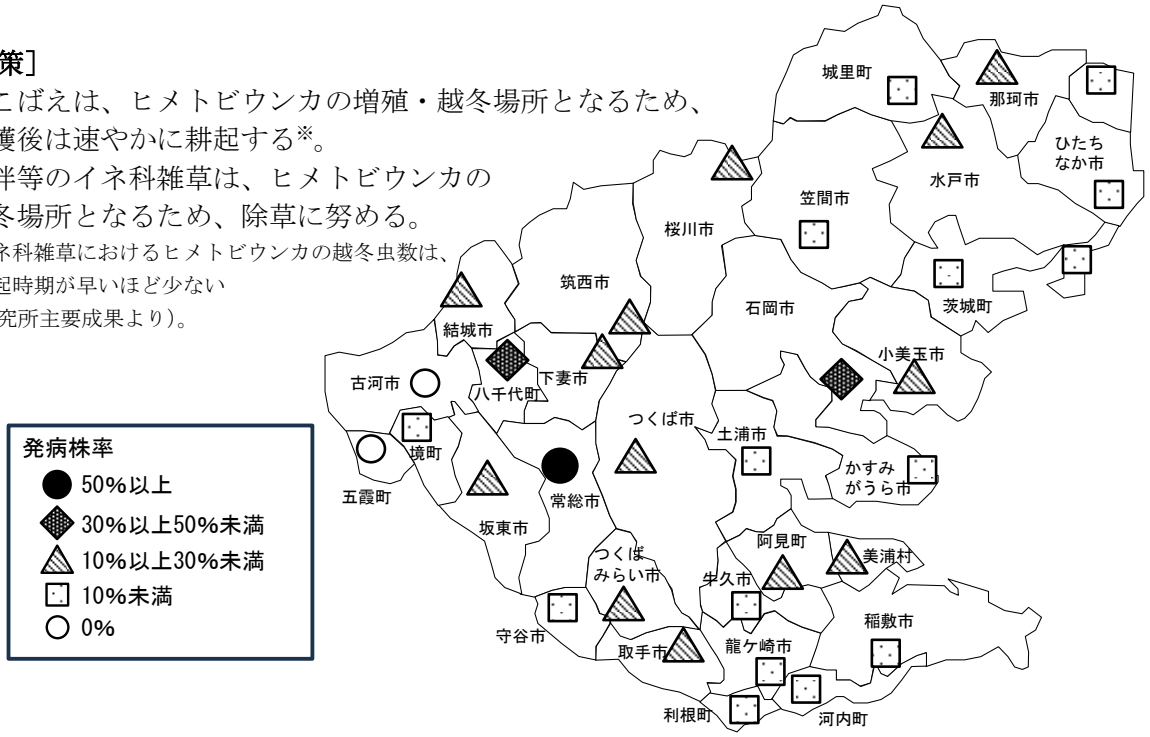


図　ひこばえ（再生稲）におけるイネ縞葉枯病の発病株率（各地点の最高値）

表　ひこばえ（再生稲）における市町村別のイネ縞葉枯病平均発病株率および最高発病株率

地域	市町村	発病株率（%） 平均[1]	最高[2]
県央	水戸市	12.5	18.0
	ひたちなか市	2.3	4.7
	那珂市	18.7	26.3
	小美玉市	9.7	21.0
	茨城町	3.5	8.3
	大洗町	1.1	3.0
	東海村	2.5	6.7
	笠間市	3.8	8.0
	城里町	3.0	5.3
	県央平均	6.3	－

地域	市町村	発病株率（%） 平均	最高
県南	土浦市	0.3	1.3
	石岡市	20.4	30.7
	かすみがうら市	2.5	4.7
	龍ケ崎市	2.9	4.7
	牛久市	1.1	2.3
	稲敷市	3.9	7.0
	美浦村	8.5	17.7
	阿見町	8.7	17.0
	河内町	3.4	8.3
	取手市	4.2	10.0
	つくば市	5.2	10.7
	守谷市	4.4	8.3
	つくばみらい市	10.2	22.0
	利根町	6.3	9.0
	県南平均	5.9	－

地域	市町村	発病株率（%） 平均	最高
県西	下妻市	6.3	18.0
	筑西市	15.3	22.3
	桜川市	6.6	17.3
	結城市	7.3	19.0
	常総市	36.2	69.7
	八千代町	17.3	30.7
	古河市	0	0
	坂東市	8.7	13.3
	五霞町	0	0
	境町	2.1	5.0
	県西平均	12.5	－
3地域平均		8.2	－

1）各市町村1地点調査。1地点あたり3～5ほ場調査（300株/ほ場）※品種不明
2）市町村内で最も高かったほ場のデータ

防除所レポート

ナシ黒星病（秋型病斑）の発病葉は翌年の伝染源となります。秋季防除・落葉処理を徹底しましょう！

１．本年の発生状況

ナシ黒星病は、5 月上旬から果実で、5 月下旬から葉でそれぞれ認められ、5 月上旬の果実での発生は平年より多かったが、6 月以降は果実、葉ともに平年並～少ない発生で推移した。落葉前の 10 月中旬に黒星病の秋型病斑（写真）の調査を行った結果、県内全域の発病度は平年並～やや高く、発生地点率は平年並であった（表、図）。

表　ナシ黒星病秋型病斑の発病度と発生地点率

地域(地点数)	発病度[1)]			発生地点率(%)		
	令和8年	平年[2)]	順位[3)]	令和8年	平年	順位
県北・県央(4)	0.04	0.89	10	25	43	6-10
県南(6)	2.22	1.36	4	67	55	3-5
県西(10)	0.30	0.33	4	30	46	6-9
全県(20)	0.83	0.74	4	40	48	7-8

1）発病度：ほ場当たり 300 葉について発病の程度をもとに算出した値。最小値は 0 で最大値は 100 となる。
2）平年値：平成 28～令和 7 年の平均値
3）順位：本年を含む過去 11 年間における本年値の順位（6-10 は 6 位から 10 位まで同じ数字であることを示す）

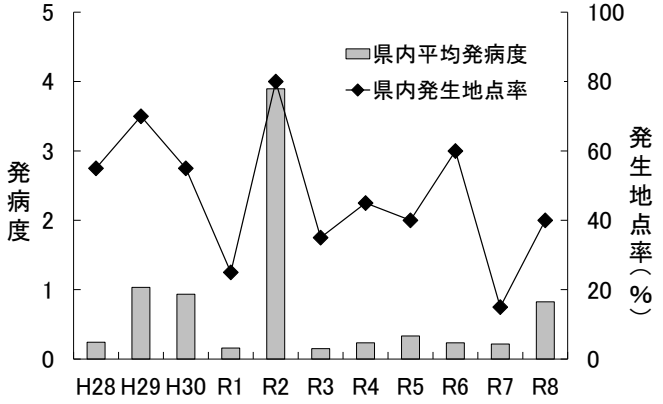


図　ナシ黒星病の秋型病斑の発生状況の年次推移



写真　ナシ黒星病の秋型病斑

２．防除対策

①秋季防除（収穫終了後から落葉前の薬剤防除）

黒星病の秋型病斑上に形成された分生子は、10～11 月の降雨により枝を流れ落ちて芽のりん片に感染し、翌年の伝染源となる。そのため、収穫終了後から落葉前までの秋季防除を徹底する。薬剤散布は降雨前の実施を心がけ、特に、徒長枝の先端に薬液が十分かかるよう、スピードスプレーヤの散布圧を調整する。ほ場の周縁部等、薬液のかかりにくい部分に対しては、手散布等により補正散布を行う。

また、農薬の使用回数は本年の収穫終了後から翌年の収穫終了までをカウントするため、注意する。

②落葉処理

秋型病斑を生じた落葉上に形成された子のう胞子は、翌年の 3～5 月にかけて好適な温度・湿度条件になると降雨の度に飛散する。そのため、落葉は集めてほ場外に持ち出す等適切な落葉処理を徹底し、翌年の伝染源を減らす。この作業ができない場合、落葉をロータリで土中にすき込むことでも効果が期待できる。

防除所レポート

令和８年の果樹におけるカメムシ類の発生経過

本年の果樹におけるカメムシ類の発生経過について、県内の山林（42 地点）での越冬数調査、サクラ（2 地点）での生息密度調査、予察灯等（2 地点）での誘殺数調査およびナシ調査ほ場（20 地点）での被害果調査の結果をまとめましたので、参考にしてください。

［カメムシ類の主な発生種］

本県において果樹を加害する主なカメムシ類はチャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ等である（写真）。カメムシ類の発生量に対して主要な餌（スギ、ヒノキの果実（球果）等）の量が不足すると果樹園に飛来してウメ、ナシ、カキ等の果実を吸汁加害する。



写真　チャバネアオカメムシ（左）とツヤアオカメムシ（右）成虫

［本年の発生状況］

1.　山林でのチャバネアオカメムシの越冬数調査（2 月）

本年 2 月上旬頃に山林の表層土を含んだ落葉を 1 地点当たり 30 リットル採取し、越冬数を調査した結果、越冬成虫数（本年値 2.1 頭、平年値 2.3 頭）は平年並、越冬地点率（本年値 55%、平年値 41%）は平年並～やや高かった。

2.　サクラでのチャバネアオカメムシの生息密度調査（4 月下旬～5 月）

餌となるサクラに移動する時期にサクラ果実（10 結果枝）の生息密度を調査した結果、生息密度（本年値 1.8 頭、平年値 5.0 頭）は平年並～やや低かった。

3.　予察灯・フェロモントラップでの誘殺数調査（4～10 月）

チャバネアオカメムシの越冬成虫は 4 月第 6 半旬から誘殺され、平年並の発生時期であった。かすみがうら市に設置した予察灯における 4～7 月の総誘殺数（本年値 1,267 頭、平年値 612 頭）は平年よりやや多く、8～10 月は平年よりやや少ない～少ない誘殺数で推移した（図）。ただし、大子町に設置したフェロモントラップでは 8 月以降も平年より多い誘殺数で推移し（図）、地域によって誘殺数の推移に差がみられた。

ツヤアオカメムシの越冬成虫は 4 月第 4 半旬から誘殺され、平年より早い発生時期であった。かすみがうら市に設置した予察灯における 4～7 月の総誘殺数（本年値 537 頭、平年値 128 頭）は平年よりやや多い～多く、8～10 月は平年並の誘殺数で推移した（図）。

4.　ナシ調査ほ場での被害果調査（5～9 月）

6 月上旬に被害が認められ、8 月下旬における被害果率（本年値 0.1%、平年値 0.2%）は平年並であった。

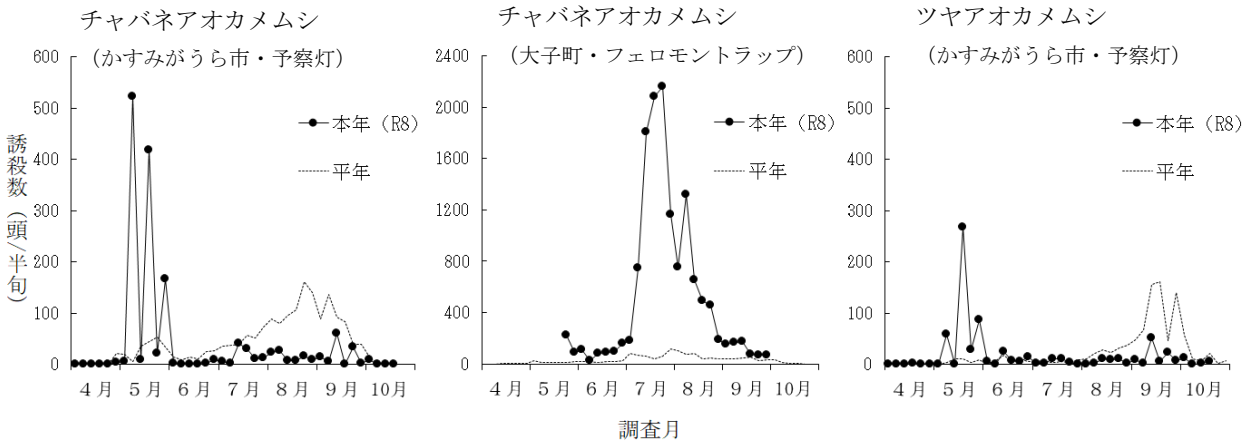


図　チャバネアオカメムシとツヤアオカメムシの誘殺数推移

Ⅱ．今月の気象予報

関東甲信地方１か月予報

（予報期間　10 月 31 日から 11 月 30 日）

気象庁（10 月 29 日 発表）

＜向こう１か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）＞

[確率]

要素	予報対象地域	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気温	関東甲信全域	10	40	50
降水量	関東甲信全域	20	40	40
日照時間	関東甲信全域	40	40	20

[概要]

平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

＜1 週目の予報＞　10 月 31 日（土曜日）から 11 月 6 日（金曜日）

気温　関東甲信地方　高い確率 50%

＜2 週目の予報＞　11 月 7 日（土曜日）から 11 月 13 日（金曜日）

気温　関東甲信地方　平年並、高い確率ともに 40%

＜3 週目から 4 週目の予報＞ 11 月 14 日（土曜日）から 11 月 27 日（金曜日）

気温　関東甲信地方　高い確率 60%

予報に掲載の病害虫を防除する場合は、「**茨城県総合防除計画**」の別表２―１を参考に化学農薬のみに依存しない「**総合防除**」を心がけてください。

茨城県総合防除計画

農薬を使用する際は

１ 使用する農薬の「ラベル」と登録変更に関する「チラシ」等を必ず確認し、適用作物、使用方法、注意事項等を守りましょう。

２ 散布時には、周辺作物に飛散（ドリフト）しないよう注意しましょう。

３ 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。

４ 薬剤抵抗性の発達を抑えるため、作用機構分類（FRAC コード、IRAC コード）の異なる薬剤を用いてローテーション散布しましょう。

５ 農薬の使用後は、散布器具やホース内等に薬液が残らないように良く洗浄しましょう。